

# 伊是名集落における生活者の語りから導かれる空間図式の探究 (民家の一番座・二番座と雨端に注目した住空間の特徴) Exploring Spatial Schema of Folk House in Izena Village through the Narratives of the residents (A Study of Characteristics of Dwelling Spaces focusing on Ichiban-za, Niban-za, and Amahaji.)

篠崎 健一<sup>†</sup>, 藤井 晴行<sup>‡</sup>  
Kenichi Shinozaki, Haruyuki Fujii

<sup>†</sup> 日本大学, <sup>‡</sup> 東京工業大学  
Nihon University, Tokyo Institute of Technology  
shinozaki.kenichi@nihon-u. ac. jp

## Abstract

This paper aims to discuss the characteristics of spaces and folk life lived in traditional folk house in Izena village, Okinawa, Japan. And to extract spatial schema of Folk House. The study focuses on the spaces called "Ichiban-za", "Niban-za", and "Amahaji", which are important components and plays essential role in their ordinary life of traditional Okinawa-Izena Folk Houses.

Through the interviews to the residents, the authors collected 12 examples of narratives about their lives and houses. Through the analysis, the texts are divided into two categories of sentences such as 1) to show the composition of architectural spaces and elements of the house, and 2) to show the act and behavior of the residents. The authors found the characteristics of the space such as "homogeneity and heterogeneity of Ichiban-za and Niban-za", "expansion of area as territory of Ichiban-za: a schema of a concentric circle", "continuity of territory of Niban-za out to the front yard of the house", and "change of characteristics of borders of the house".

**Keywords** — **Spatial Schema, Narrative, Characteristics of Space, Folk House, Izena**

## 1. はじめに

### 1. 1. 研究の背景と目的

本研究は、沖縄本島北方の離島伊是名島の伊是名集落に暮らす生活者の語りから、伊是名集落の民家にそなわる空間の特徴を抽出しその空間図式を明らかにすることを目的とする。

筆者らは、空間の認識を方向づける心的な構造を空間図式にとらえ、人びとの生活する民家や集落の空間は、この心的な構造によって方向づけられた認識に基づいて構成されると考える。

民家の研究は、歴史学的な立場からは、復元と修復(太田ら 1967) という視点から、空間構成の物質的側面を探究し空間構成の仕方や形式について議論する。

建築の計画学は、空間の構成と人の行為(生活)の関係を議論し構築する<sup>注1)</sup>。民家における生活は、生活行為の観察のほか、民家の設え<sup>注2)</sup>や家具配置、生活者への聞き取りなどにより理解されるが、観察者や聞き手の解釈が前提となる。人が暮らし生活することから空間構成と生活行為の間の明瞭な関係を見出しにくいこともあり、議論は空間構成の側面に傾くことも多い。生活という側面を補うために他分野の知見に基づく定型的な主張を述べることもあるが、必ずしも眼前の生活の実体と合致しているとは限らない。

本研究は、集落における生活の経験を写真日記と写真 KJ 法により構造化し原型的な空間図式を抽出しようとする試み(篠崎・藤井ら 2015)の延長にあり、直接的には、伊是名集落における経験の蓄積により民家の空間図式を探究する試み(篠崎・藤井 2016)の語りの解釈について詳述しようとするものである。

筆者らは、現実のフィールドにおける経験を蓄積し、発見的な方法で場所の特徴や身体的な空間図式を探究する試みとその方法の検証を繰り返している。



図1 伊是名の地理・集落風景

注1) 例えば劇場の計画において、1) 劇場の物質的な空間構成と、2) 聴衆がそこを訪れ観劇する、作品を創り演じる、裏方に関わる人びとが働くなどの行為が、整合するように両者の関係を構成することなど。

注2) 設え(設い)とは、家具調度、戸や衝立のような可動の空間構成要素の配置や配列で、生活の仕方がそこにあらわれると考えられる。

## 1. 2. 伊是名集落と民家の一般的特徴

伊是名集落は、沖縄の伝統的な集落空間の構成と景観の特徴が残り、伝統的な生活、信仰や祭祀、御嶽や拝所などの歴史的空間の残る興味深いフィールドである。民家は、屋敷囲いという石垣とフクギによる囲繞に囲まれ、主屋（うふや）と炊事屋（とんぐわ）と付属屋という家屋と、庭であり作業にも利用される外部空間により構成される。家屋は琉球民家の伝統的な木造軸組構法で築かれ、雨端（あまはじ）と呼ばれる奥行き一間ほどの半外部の軒下空間が家屋の外周にある特徴がある。雨端は強い雨風や陽射しを遮り民家の住環境を調整し、人の来訪の場となる。

座敷は南面し、床の間のある客間である一番座と仏壇のある二番座が最も大切にされ、民家の表（おもて）である南側に東から順に並ぶ。北側には裏座と呼ばれる相対的に私的な空間がある。台所はほとんどの場合家屋の西側につくられる。これはかつて、座敷のある主屋（うふや）と竈のある炊事屋（とんぐわ）が、屋敷の東西に別棟として建てられていたことに由来する。やがて二棟は合体し民家の空間構成は、現在に至る住まい方に対応するよう変化したと考えられている。

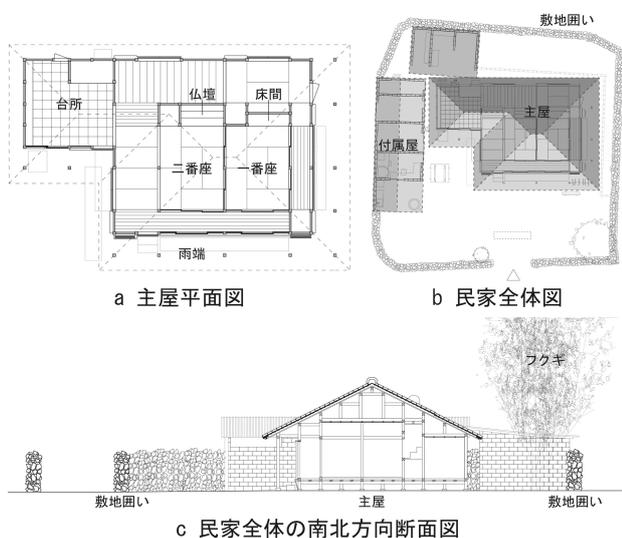


図2 伊是名の民家の実例

集落を歩くと、上述した琉球民家の空間的特徴ある民家を多く観察できるが、同時に多くの民家の改変も観察できる。例えば、集落の景観にも関わる屋根の形状や材質の大きな改変、琉球民家の特徴である雨端へのアルミサッシ取り付けなどである。その他一見無秩序に見える生活の変化に合わせたさまざまな改変が、伝統的民家になされている。

## 2. 研究の方法

本研究で扱うテキストは、第三者があらかじめ文字にしたものではなく、研究者がフィールドにおいて採集した人びとの語りである。

常に変化する生活において、伝統的な生活の仕方や空間の構成は、時代を経ても変わらない、あるいはかたちを変えて継承されるものごとと、時代に従い変化し変遷するものごとがあると考えられる。これらを生活者の言葉を通して民家の空間の特徴として抽出し、空間図式として表現することで、民家の空間の身体的な原型的性について議論できるのではないかと考えている。

### 2. 1. 多様な語りを集める

生活者の、さまざまなレベル、内容や強度の空間認識を語りとして取りだしたい。そこで、

- 1) 多様な語りを集める
- 2) 語りを解釈する者の生活の身体的経験を高める
- 3) 語りの分析（解釈・考察）の仕方を工夫することが大切であると考えた。

1) 多様な語りは、会話の志向を限定せずさまざまな語りを導くよう、操作や誘導を排除することを心がけた。筆者らの専門である建築のフィールドに語りも方向づけられてしまうこともあるが、その分なお、一般的な生活や一見建築とは関係のないことがらに耳を傾けた。祭祀や習慣、家族の身の上話といった語りの中にも何かしらの発見がある。

語りの採集は、民家において、民家の実測調査と同時に平行しておこなった。実測調査は、民家の空間を構成するさまざまな建築構成要素や家具などの眼前の事実を、測り、記録する調査である。語りの聞き取りだけに集中するのではなく、生活の場全体に目を向けることができ、民家の建築の部分や構成を指し示しながらの語りや、その場で記録した図面を介した語りも得られるなど、具体的なものが語りの内容を強化する。

2) 語りを解釈する者の生活の身体的経験の向上については既に（篠崎・藤井 2016）に詳細報告したように、筆者らは、報告当時1年半にわたり継続的に伊是名集落を訪れ集落の生活を経験してきた。現在、経験の継続は2年半となる。異なる主題の研究の並行遂行、祭りなどの体験の共有、日常生活における会話、集落空間における写真日記の作成、文献調査や思索な

どにより生活の経験を積み重ねてきた。表1に伊是名訪問の履歴を示す。

3) 語りの分析の工夫は、語りは聞き取る者の解釈なしに理解されないことを研究者自身が意識し、語り手の言葉があらわす何かや語りの中にあるかもしれないもの、聞き手の理解が及ばないゆえに未知かもしれないものごとを如何に獲得するか方法を工夫することである。<sup>注3)</sup>



図3 民家での語りの採集の様子

表1 伊是名集落におけるフィールド調査履歴

1) 2014.9.15-18	民家立面, 敷地囲いの材料 悉皆調査
2) 2014.11.1-4.	民家構造の確認 悉皆調査
3) 2014.12.23-26.	実測・語り採取調査 (伝統12民家+1民家)
4) 2015.3.16.	調査報告発表会, 懇親会
5) 2015.8.6-11.	豊年祭参加, 1)~4)の追調査・補足
6) 2015.9.15-18.	空き家, 空き地に関する調査
7) 2015.10.9-12.	実測・語り採取調査 (伝統7民家)
8) 2016.3.17-23.	調査報告発表会, 懇親会 実測・語り採取調査 (伝統6民家)
9) 2016.7.29-8.4.	豊年祭参加, 1)~8)の追調査・補足
10) 2017.3.27-31.	写真日記作成, 構造化
11) 2017.4.25.-	伊是名リビングラボ開設, 常駐体制開始
12) 2017.6.14-22. 2017.6.18-21.	集中集落後辺民家実測・語り採取調査 集中写真日記作成, 構造化

注3) 韓国の現代文学作品のテキスト分析から、韓屋の空間構成と住生活の特徴を論じた研究(金・高田, 2015)は、作品に表現されたテキストを丁寧に解釈しており、その根拠を明示し解釈のみちすじを明らかにすることにより、解釈の再現性を担保して理解の共有することを可能としている。本研究においても、このように何らかの明示的なプロセスを経ることで議論を深められないかと考える。

### 3. 行為と空間構成の関係の特徴

#### 3.1. 語りの採集

前述の経過を経て、伊是名集落 158 民家のうち 26 民家の調査を行った。調査は、民家の内外部の空間の実測調査と語りの採集で、2014年12月(第3回)、2015年10月(第7回)、2016年3月(第8回)の3回に、それぞれ13, 7, 6 民家について行った。第3回調査における1民家は現代建築であるため、伝統的な民家を対象とした調査は全25民家である。

調査対象民家は、第1, 2回に行った集落全戸の構造形式を外部から観察する悉皆調査に基づいて抽出した、

伊是名集落の現在を代表すると考えられる6構造形式12タイプの伝統的民家(大久保ら 2015)から、調査協力を得た12民家を初回である第3回調査の対象民家とした。本稿では第3回調査で採集した12民家の語りの分析結果を述べる。

調査は、語りの聞き手1名、民家内部の実測調査2名、外部の実測調査2名の5名を基本としたチームを組んでおこなった。調査時間は一民家あたり1時間半ほどである。語りの採集は、対面して聞き手がビデオをもち、対話形式で調査協力者の語りと、語りに関する民家の状況を記録した。大抵は、最初は座卓を挟んで会話を始めるが、徐々に民家の内部や外部を歩きながら、語りの内容と関連ある場所に移動して語りを採集することとなった。調査収集データは、1) 語りを記録したビデオ、2) 聞き手が観察者として気づきを記録したビデオ、3) 実測調査担当者が図面作成のために記録した空間と気づきを記録したビデオ、4) 音声データ、5) 写真、6) 実測図面である。本稿では1)のビデオを主な分析対象とし一部2)の気づきの内容を加えた。

#### 3.2. 基礎資料の作成

語りを記録したビデオデータから、まず逐次文字起こししたテキストを原テキストとして抽出した。次に、改めてビデオを見て語りの場面を確認しながら、このテキストを単文に切り分け一次テキストとして整理した。単文に切り分けたのはできる限り解釈を排除するためである。チャントやパラグラフといった文の集合が意味をもつばかりでなく、集合を構成する個々の要素にも意味があると考えた。一方、一次テキストは分析上の問題も含んでいた。語りを生活の場である民家で採集したため、語り手と聞き手双方の眼前に、語りの対象となる場所やものが存在する。このため語りには指示代名詞が多く、逐次文字起こし単文とした一次テキストだけでは語りの内容を理解できない文が多い。地域独特の言葉や言い回しも多く、語りを分析する基礎資料に一次テキストを用いることは難しいと判断した。<sup>注4)</sup>

そこで、単文のテキストを、誰もが最も基本的な文意を理解するように、必要な言葉を補うこととした。補う言葉は、その文の前後に現れる既にテキストに使用されている言葉や、ビデオの映像から誰もが明らかに理解する言葉とした。建築の言葉を用いることで内容がはつきりするならそれらの言葉を用いた。

言葉を補うルールを表2に示し、一時テキストに付加された情報には印をつけた。原テキスト、一次テキスト、基礎資料としたテキストの関係を図4に示す。

得られた基礎資料の文は、文を解釈して、文の示す内容(状態, 行為, 出来事など)に応じて表3のように分類した。

表2 単文とするためのルール

( )	話し手の使用した言葉を別に記す場合は、括弧に入れて記す 例: 部屋(間)
(( ))	記述の際に補った言葉は、二重括弧に入れて記す
< >	話し手動作からの推量は、その旨を三角括弧に入れて記す 例: <話し手の動作から推量>
《 》	観察事実・推論は、その旨を二重三角括弧に入れて記す 例: 《観察事実》《推論》
[ ]	聞きとりの状況や発話に関して注意すべきことがあれば四角括弧に入れて記す



F家での語りの採集の様子  
第3回調査  
2014.12.26  
10:30 ~ 12:30  
総単文数 119  
本稿分析文数 71

原テキスト(ビデオに記録された語り)

[video no. 00505]19' 55"

場所: 雨端, 二番座・一番座前・東側  
00' 00" ~ 00' 40"

<〇〇くん, 縁側の話.>

これまで、があって、こっちは、あの、この、こっちは出ていたんだけど、この方は、も、やり直しをしてたんですよ。

<雨端はどこですか.>

雨端がこちら。そうそう。

だから、昔はもうそのままだね、こっちはあって、こっちはほうはなかったんですよ。で、これ張り出しして…

<で、雨戸はここに入ってたのですか.>

こっちにあったんです。

<それで、それはやめて…>

今またね、やっぱり雨降ったりしたら、履き物も全部濡れますよね。だからもうちょっと伸ばして…

このテキストにおいては、◇は観察者の発話。

一次テキスト(基礎資料)(必要な情報を補った語り)

<南側軒先のアルミサッシュ引戸>は後から設置した。AR

((南側))雨端は、現在屋内になっている。SA

昔((新築時?))は、<現在南側の木製サッシュ引戸があるところまで>屋内空間((家))であった。SA

((木製サッシュ引戸は))前((新築時ではない))からあった。SA

((南側雨戸は))<現在木製サッシュ引戸があるところに>あった。

SA

((南側雨戸は、))現在は、ない。SA

雨が降ると((雨端においてある))履物が濡れるので屋内空間を<軒先まで>延ばした。AR

図4 語りの採集と基礎資料の作成

表3 単文の内容表示

<u>STATE</u>	状態を示す
SA	: 建築要素に関する事実(場所・位置, 構造, その他の特徴) むかしの台所は土間でした。 土間には竈がありました。 三番座は畳敷きでした。
ST	: 道具・家具に関する事実(場所・位置, 構造, その他の特徴) ここに棚がありました。
SC	: 創造物に関する事実 火の神さまはいつも向こうです。
SR	: 記録 そういう言われがあります。
SL	: 家族や生活に関する事実 兄弟は6人でした。 父は72歳です。
SV	: 集落の空間に関する事実
<u>ACTION</u>	行為(出来事の種類)を示す
AL	: 生活行為に関する事実(主体, 内容, 場所, 道具, 理由, 状態変化など)
AR	: 建築行為や改修行為に関する事実
AS	: 設え行為に関する事実(主体, 内容, 場所, 道具, 理由, 状態変化など)
<u>EVENT</u>	出来事(ある状態から別の状態への変化)
EV	: 同じ出来事

3.3 行為と空間構成

採集した全テキストから基礎資料として1500あまりの文を得た。一軒ごとに異なる民家における生活者の語りを集めて一括りの基礎資料として扱うことについては、伊是名島の民家における共通した住まい方とその変化の傾向がある(大久保ら2015)前提に立ち、これを可と考える。

基礎資料の文の内容ごとの出現数(文章数)は表4の通りである。

表4 基礎資料の内容分類

文の数 = ca. 1500			
A	: ACTION	S	: STATE
E	: EVENT		
<u>SA</u>	596	State	ARCHITECTURE
ST	49	State	TOOLS
SC	31	State	CREATURE
SR	19	State	REASON/RECORDS
SL	122	State	LIFE/FAMILY
SV	18	State	VILLAGE
<u>AL</u>	234	Action	LIFE
<u>AR</u>	275	Action	RENOVATION
AS	5	Action	SHITSURAE

下線を施した、AL生活行為に関する事実、AR建築行為や改修工事に関する事実、SA建築要素に関する状態事実が多く語られていることがわかる。

### 3. 4. 一番座、二番座と雨端空間の考察

基礎資料の文総数が 1500 と多く、民家の全体を概観して空間の特徴を導き出すことが容易でない。そこで、まず一番座と二番座、雨端を中心として分析し考察をおこなうこととする。先に理解したように、一番座、二番座、雨端は、沖縄、伊是名の民家の伝統的な空間であり、集落における生活の経験からも民家の生活の大切な場所であることを実感するからである。

基礎資料からの該当する文の選出は、文の内容を理解（解釈）しておこない、曖昧なものは選出し重複を許し、抽出した文の総数は総計 228 となった。

基礎資料を、

- 1) 住み手の行為を表現する文
- 2) 物質的な構成と構成の変化を表現する文の二種類の文のタイプにわけて考察する。

二つの文の種類を意識しながら、文の表現する内容を解釈し民家の空間（一番座、二番座、雨端）に対応させながら考察を進めた。この時 1) 例えば行為とともにその位置やありかたが変化する小さな家具や器具などの物質の構成に関する表現は、行為を表現すると考えることが実態に合うので行為ととらえ、2) 物質的な構成の過去から現在への変化を表現する文は、改変の行為だが、物質的な状態の変化と考えることが理解しやすいので物質的な構成ととらえることとする。

このようにして、テキストを、ボトムアップで組上げて、構成される構造を抽出することにより、民家の空間の特徴を描き、空間図式を議論する。この作業は第一筆者の責任においておこなった。

## 4. 民家の空間の特徴と空間図式

### 4. 1. 語りが導く民家の空間の特徴

#### 4. 1. 1. 一番座・二番座の同質性と異質性

Das01 伊是名の民家の一番座と二番座は、異質性と同質性が同居している。一番座は客間で最も格式が高く、二番座は仏間であることは異質だが、二つの座敷が民家の他の空間とは異なる一体の場所としてつくられ、また日常、非日常において一体に使われていることは同質である。

Cas01 一番座は客間として使われ他の空間より格が高い。

Ba01 一番座は客間であり、男性の場所であり、民家の中で最も格式が高い。

- A01 お客様を一番座でもてなす。 A204,A186  
 A05 男の人は一番座で休む(寝る)。 A217,A218  
 A02 一番座は大切なところなので、一番座には直接外部から入らない。 A185

Bs03 一番座は二番座と異なる空間である。

S34 一番座の天井は、二番座の天井より高い。 B19

Cas01 伝統的民家には必ず一番座と二番座があり、他の民家の空間とは異なる場所である。

Bs02 伝統的民家には一番座と二番座がある。

S01 沖縄の民家には、みな一番座と二番座がある。  
J88,H108

Bs04 一番座と二番座は、民家のその他の場所から離された特別な場所であり、一体の場所である。

S02 一番座と二番座は欄間で囲われていて昔から変わらない。  
I144,J3

S10 座敷と縁側の間には新築当時障子が設置されていた。  
F29,F82

S05 一番座も二番座も四畳半である。 H2,H3

S04 一番座と二番座は連続していて遮るものがない。  
L2,L3

Cas01 一番座も二番座も日常的な生活の場となるほか、特別な場合には連続した場所となり訪問客をもてなす。

Ba02 一番座も二番座も普段の日常生活の場として、起居、就寝に使用する。

A03 普段は一番座に居る。 F21,F22,L5

A09 普段は二番座に居る。 D66,J54,J56,L9

A04 一番座と二番座でどちらにも同じように寝る  
A203,J90

A06 一番座でベッドで寝る。 C1,L1

Ba03 一番座と二番座は連続して使われ、大勢の訪問客をもてなす。

A13 お盆など大勢の集まる時は、一番座と二番座にふたつ座卓を並べて使う。 H99,J89,H97,H100

A17 みな来ると、二番座の前から家に入る。 A63, D67

Cas01 床の間や仏壇が大切にされ、普段の南面からの出入りは、これらの正面を避けている。

Ba10 床の間や仏壇などの座敷の北側の設えは人びとにとって大切であり、南を向いている。

A07 床の間に足を向けてはいけないという。 A198

A12 仏壇に足を向けて寝てはいけないという。 A197

Ba09 普段の出入りは、一番座や二番座の前ではなく、三番座や台所の前を使っていた。

A16 家族などは南の縁側（二番座・三番座前）ではくつろがず三番座西の縁側でくつろいだ。 A168

A18 二番座前あるいは一番座前から入るのはほとんどない。  
F69

A33 家への出入りは、台所南端と二番座前からしていた。台所南端から二番座縁にも廻った。 C121, C123

#### 4. 1. 2. 一番座の南東方向への領域拡大

Das02 伊是名の民家の改変は、一番座の領域を、民家の伝統的空間構成の一番座周縁の縁側や雨端を取り込むように、南東方向に拡大する場合が多い。

Cas01 特に一番座の領域の拡大は、南や東の縁側や雨端を取り込むようになされる。

Bs05 一番座の領域を、周囲の縁側や雨端を取り込むように拡大する傾向がある。

- S06 一番座は四畳半から六畳に広げたが、二番座は広がっていない。 F24,F25
- S09 子どもたちが独立してから一番座南の縁側を軒先にアルミサッシュを入れて部屋にした。F17,F18,F19,F20,F15
- S11 一番座南の雨端を、軒の先端に、子どもが落ちないように高窓の開いた壁をつくり部屋にした。H6,H111,H112,H110
- S14 一番座の南は縁側の柱を抜き、雨端の先端まで室内空間を拡大し、奥行き一間の部屋とした。 I18,J61
- S22 一番座と東側縁の仕切りを撤去し縁側を畳敷きにして、一番座を広げた。 F11,F13,F14

Cas01 民家の改変は、伝統的な空間構成の座敷の外周の空間を取り込むように行われ、幾重にも重なる境界のあり方を変化させる。

Bs06 民家の改変は、民家の幾重にも重なる境界のあり方を変化させ、軒先までを内部化し強い境界を形成する。

- S13 家を拡張したときは一番座や二番座を拡大するのではなく縁側や雨端を内部に取込むように空間を広げた。I60
- S18 昔の雨端の先端まで、家を全体的に拡張している。 I44
- S19 一番座二番座南の雨端の先端にコンクリートの壁、柱、梁をつくり、二番座南の縁側と一番座南の部屋が追加されたという。 H20,H21,H22,H4
- S15 一番座や二番座の縁側の南端にアルミサッシュを入れて内部化して縁側を畳敷きにするなどした。 F26,J2
- S53 南側雨端を取り込み内部空間とした。 F2,F3,F7

Cas01 一番座の東側は、東の庭の外部と内部、表と裏の接続する場所だった。

Ba07 一番座の東側は、表裏の連続や外部と連続する場所だった。

- A29 一番座の東の縁から、裏座に廻れた。 H107
- A30 一番座の東側から出入りしていた。 D53,A224

Bs08 一番座東側で、表と裏が連続していることが生活に合致していると考え。

- S23 一番座を拡大したために、裏座へ通じる扉を新たに設けた。 F12,F13\*
- S24 昔は、一番座の東側で、裏に通じる扉があったが、そこを押し入れにしたので通れなくなった。 H113,H114,H107,C86,C87

Bs12 民家の東側の一番座や裏一番座で、東側外部と出入りすることができた。

- S25 一番座の東には縁側はなく、座敷の東はすぐ雨端だった。 H109
- S26 裏座の東に、外から直接入れる扉があった。 I62

Cas01 一番座の東側の縁側や雨端を、物置や棚にするような改変が行われる。

Ba08 一番座の東側は、今は日常生活行為のための家屋内側から使う場になっている。

A28 一番座東の縁は、物置や洗濯物干し場として使われている。\* C22,B18,C20

Bs09 一番座には、座敷周縁領域に収納に関する改変がある。

- S17 昔布団を入れていた床の間横の収納は、今は裏座から使う物入れ収納になっている。 A195,A196,A222,A223
- S16 一番座南東角の布団入れの収納は、昔はなく、東縁側から南縁側に回って行くことができた。 A191,A192,F16

#### 4.1.3. 二番座の求心性と外部への拡張性

Das03 伊是名の民家の二番座の前は、訪問者や祭祀、儀礼などの外部世界と民家の接点として、外に広がる方向性をもつと同時に、二番座の仏壇に向かう求心性がある。実空間の改変による領域拡大はないが、意識の上での空間の拡大があるととらえることができる。

Cas01 二番座の前は、訪問者や祭祀、儀礼における外部世界と民家の接点として大切にされている。訪問者を茶でもてなすイハジューテはそれが日常化したものである。

Ba04 二番座と二番座の前の雨端の空間は、祭祀、儀礼や改まった特別な場合の、外部との接点である。

- A08 お客様を二番座でもてなす。 J55
- A15 改まった時や改まったお客さんは、二番座の前に来たり二番座の前から家に入る。A163,A176,A178,A179,A184

Ba05 二番座の前は、拝みなどの外の環境と民家の接点となる場所である。

- A27 二番座の前の雨端にオニヨケというまじないを吊るす。 D85,D86,D87
- A26 ヒヌカンの拝みは、二番座の前で門の方向を向いて拝む。
- A14 お盆の時などは、二番座を縁側まで広げて送り盆をする。 H98

Ba06 二番座の前は、イハジューテという誰彼を問わずお茶でもてなす訪問者と接する場である。

- A19 二番座の前にいつもお茶の用意をしている。 B2,A80
- A20 二番座前の雨端に、椅子が用意されている。\*B3, B4
- A21 二番座の前のお茶の用意は家に誰もいなくても誰でも自由に入ってくださいということだ。 A78,A81

Cas01 二番座は仏壇とともにある空間で、仏壇への求心性がある。また民家の中心的な場所だからであろうか、他の空間に比し、改変が少ない。

Ba11 二番座の仏壇は大切にされており、行為が仏壇に向かう方向性がある。

- A10 二番座の仏壇に祖先を祀る。 H17,A69
- A11 亡くなった人は二番座の仏壇の前に寝かせる。 A202
- A25 銘々膳を仏壇の前に置いて、ヒヌカンの拝みをする。 F96,L6,L7

Bs10 二番座や二番座周辺の場所は、あまり改変されない。

- OS7 二番座は、仏間でもあり、柱で南北に分かれるようだが、ひとつの間である。 A67,A68,A69\*
- S08 仏壇の位置が高く手が届かないので下げた。 I142,I143

S21 二番座には仏壇があるから、玄関を二番座の前につくるわけにはいかない。 L25,L26

#### 4.1.4. 伝統的な境界の変化

Das04 伊是名の民家の伝統的な開放的な空間構成は、大切にされるが、外部環境に抗うために、民家の構造や境界をコンクリートやブロックとし、開口部にアルミサッシュを用いるなど、強固な境界を形成する。これによって民家の内外の対比が明瞭になり、行為も追隨する。

Cas01 南面の境界の改変は他の方位に比し優先される傾向がある。強力な風雨など外部環境に耐えるため、構造自体を強化して壁をつくったり梁をまわし、アルミサッシュを入れる。

Bs07 民家南面の境界のあり方が変化し、雨戸しかない雨端から、工業製品の堅固な境界になっている。

S20 もともとの木造軸組の雨端の先端に柱をたて、RCの梁を一周させて（ハチマキを巻いて）もたせて、開口を大きくとりアルミサッシュを入れた。 I39,I149,I151

S48 南側雨端の先端にコンクリートブロック壁を（40年ほど前などに）につくった。 D8,G4

S50 そのコンクリートブロックの壁は、西側雨端の壁と一緒につくった。 D49

S51 南開口部は、現在アルミサッシュが入り雨戸はないが、かつて雨戸があったことがわかる。 C27,C32,F1,F4,F5,F6

Bs15 アルミサッシュは、ありあわせでも入れることがある。

S47 アルミサッシュは本家のものをもらい、入れてから10年になる。 A83,A84

S54 アルミサッシュは、隣島の基盤整備時に安く購入したので家の開口部にちょうど合うサイズではないが、なんとか入れた。 G5,G6

S58 南側開口部には（雨戸も残るが）アルミサッシュを（もらうなどして）入れた。 A189,G3

Bs16 外部環境から民家を護るために雨戸や軒の強化が必要である。

S52 雨端などの軒裏に収納してある角材は、台風の時に防風対策で雨戸を押さえる貫である。 B64,B65,B66

S55 （アルミサッシュがあるため）新築時はつけなかった雨戸を、数年前につけたところ、台風の脅威は全く感じなくなった。 J17,J156,J157

S57 昔からのままの雨戸は、風でガタガタするので、紐で縛ったり貫で抑えたりする。 A187,A190

S66 軒を出したり軒裏を丈夫にして、強い風に耐えるようにした。 C34,C35

Bs17 南側の雨端やサッシュなどの境界部分の改変が、他の方位の同様の部分より優先される。

S59 東側開口部にはアルミサッシュを入れておらず、昔のままの雨戸が残る。 A188

S60 南側開口部の雨戸の内側にアルミサッシュを入れた。 F8,F9

S61 東側開口部には、昔は雨戸だけだった。 F10

Cas01 民家南側の雨端は大切な空間で、大切に手を入れながら使われている。

Bs11 雨端の空間は必要な空間で、手を入れ大切にされている。

S12 二番座の南の雨端の柱は、二本とも腐ったので取り替えたため、細い径の柱となった。 D83,D84

S49 南側雨端の先端のコンクリートブロックの壁は、雨端の柱が腐ったので壁とした。 D9,D10

Bs18 南側に縁側や庇をつくり、雨端空間を創出しようとする。

S62 南側に座りやすいように縁側をつくる。 F81,G1

S64 新しく作った家には雨端がないので、庇を新設した。 L28

S65 新しく作った家には縁側がないので、新設した。 L30

Bs19 雨端の高さや軒のあり方は風士にあつていて、それ自体が大きく改変されることはない。

S56 雨端は高さが低く抑えられていて風士に合っているが、内部の天井も低くなる。 I20,I32,I38

S63 南側縁側の天井は、かつての雨端の軒裏のままである。 G2

Cas01 伊是名の伝統的民家は、基本的に開放的なつくられ方をしており、日常的にも家屋を開放しているような生活が営まれていた。

Ba12 民家は、普段から戸が開放され庭や集落など外部の環境と連続している。

A22 家の雨戸が全部開いていて、みな家を開けたまま外へ行く。 A79,A82,A88

A23 家が全部開いていたので、出入りはどこからでもよかった。 F66

Ba13 雨端や民家の南側は、基本的に庭や外部に対して開かれた設えをしている。

A24 一番座・二番座の南（の濡縁や雨端の前）にテーブルや椅子、ベンチなどが置かれている。\* L13,A312

Cas01 裏座は、表座に比べより日常的な空間であるが、領域の拡大もおこなわれている。

Ba14 裏座は、普段の日常生活の様々なことに使われる。

A31 裏座で就寝する（裏一番座）。 J15,F23,J141,A220

A32 裏座には、多くの生活のためのものが置いてある（倉庫のようでもある）。 J13,H12,H83

Bs13 裏座も生活領域が拡大されている。

S27 裏一番座も北に半間増築した。 F54

S32 裏二番座を雨端まで半間延ばした。 F52,F51

S29 裏座の北開口部には、アルミサッシュが嵌っている。 I58

Bs14 裏座は、子供が使うなどの日常的な生活の場であった。

S28 裏一番座は、子どもの勉強部屋だった。 F54\*F55,C88

S30 裏座には部屋が二つある。 J140,H115,J40

S33 裏二番座はもともと板張りだった。 F53

S31 裏座の北東角には半間角の押し入れがある。

\*は、筆者らが語りを採集しながら観察して補った事実である。

S35-S46 は三番座の部分に対して与えられた番号なので欠けている。

## 4.2. 語りが導く民家の空間図式

### 4.2.1. 一番座・二番座の同質性と異質性

伊是名の民家の一番座と二番座の同質性と異質性は、客間と仏間という各々の特徴ある空間のまとまりとしてとらえることと、両座敷をひとつの空間としてとらえることとして表現される。それぞれのまとまりの空間を求心性のある円で囲み空間の領域と境界を示した。

### 4.2.2. 一番座の南東方向への領域拡大

一番座の空間は、民家の伝統的な空間構成である、幾重にも重なる境界を少しずつ取り込みながら、南東方向に領域を拡大する。元々の一番座の空間の構成は残り、縁側や雨端の取り込みの痕跡も同様に残る。伝統的な重なる境界の痕跡を残しつつ、内部空間の領域が広がることを、同心円に近い表現であらわした。

### 4.2.3. 二番座の求心性と外部への拡張性

二番座は、仏間として先祖代々の家を護る求心性がある。民家の中心とも考えられる。一方、二番座の前の空間は、民家と外部の環境との接点としての広がりをもつ。中心と周縁、また中心から外部環境に向かう方向性のある空間として図示した。

### 4.2.4. 伝統的な境界の変化

民家の雨端の境界は、強い構造や材料によって補強され、外部環境に抗している。それゆえ民家の境界は、かつての弱い境界が幾重にも重なる図式ではなく、強い数少ない境界が、民家を外部環境から切り離す図式となる。これは、民家の正面である南面に強くあらわれる。このことを強いがなお選択的な透過性をもつ、工業製品を考え、直線的な境界としてあらわした。

### 4.2.5. 空間図式の描出

上述した図式を図5として描出した。

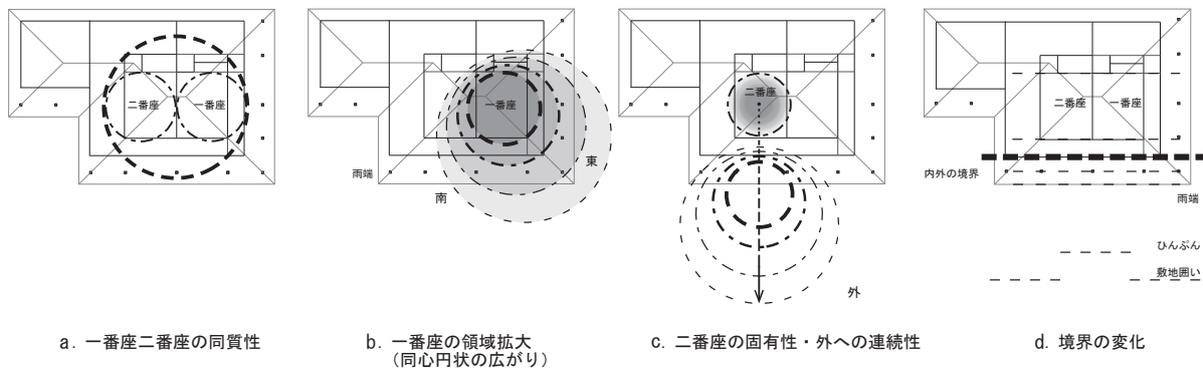


図5 語りが導く民家の空間図式

## 5. まとめ

伊是名の民家の一番座と二番座と雨端の空間に注目し、生活者の語りを採集して、これを基礎資料として分析することで、伝統的な民家の空間の特徴を理解し、図式表現した。

### 参考文献

- [大久保ら 2015] 大久保崇・藤井晴行・篠崎健一：沖繩伊是名集落の空間構成への住意識の現れ-空間図式と建築の実体との結びつきに関する研究 その1-。日本建築学会大会学術講演梗概集，2015，9。
- [太田ら 1967] 太田博太郎，大河直躬，青山賢信，鈴木充，関口欣也，吉田靖，『民家のみかた調べかた』1967，文化庁監修，第一法規
- [金・高田 2015] 金海梨，高田光雄，2015，“韓屋におけるチェとマダンのつながりに対応した住生活の特徴に関する一考察（韓国現代文学作品『庭の深い家』を対象として）”，日本建築学会計画系論文集，Vol. 80 No. 718，pp. 2763-2770，2015，12。
- [篠崎・藤井ら 2015] 篠崎健一，藤井晴行，片岡菜苗子，加藤絵理，福田隼登，“空間図式の身体的原型の実地における空間体験に基づく研究(写真日記を基礎資料とするKJ法の試み)”，認知科学，vol. 22，no. 1，pp. 37-52. 2015，3。
- [篠崎・藤井 2016] 篠崎健一，藤井晴行，“聞き取り調査から描きだされる伊是名の民家の空間図式（民家の一番座・二番座と雨端に注目した住空間の特徴）”，日本認知科学会大会2016，OS フィールドに出た認知科学2，2016，9。